



思いつくまま—ちょっと私事も

全国公害研協議会

顧問 寺部 本次

(元川崎市公害研究所長)

1. まず、脳裏に浮かぶのは会誌のこと。77年～89年（通巻第3号～第33号）の12年間編集委員で、大先輩の加地 信先生をはじめ、渡辺 弘、氷見康二、高橋克巳の諸先生のご意見をいただきながら、編集の総括的なことにたずさわった。平成元年度(1989)に、協議会の学術部会が発足、北 博正先生のもとで、組織的かつ積極的な会誌の編集がスタートした。強力な編集陣にバトンタッチできて安堵と喜び。本会のますますのご発展を祈る。
2. 「NO₂汚染、首都圏加速」の見出し(3.9.13. 朝日)に当局の苦労が浮かぶ。ここで、自動車排ガス測定局の位置の見直しも検討の要。発生源か環境か、外国とも比較して論じてほしい。(例えば川崎市の池上自排局のNO_x濃度について、当局の悩みも絶大)。国、学会においても、サンプリングの位置を含め、総合的な検討を願いたい。
3. 「公害と対策」誌(Vol. 27 No. 11)に掲載の「現代公害・環境年史」(寺部本次編)について、ご批判・ご意見をいただけたらうれしい。(私事で恐縮ですが、Tel. & Fax. 03-3711-2369へ)
4. 最近、一身上の環境変化もあり、偶然「伴侶に先立たれたとき」(A. デーケン、重兼芳子編、春秋社)の執筆者のなかに、大原健士郎先生(浜松医大教授)、勝沼恂子さん(ボランティア)のお名前が目止まった。大原先生は「遺された者の愛、精神医学の立場から」と題して、奥さんを無くされたご自身の心理経過を詳しく述べている。

勝沼さんは「死別体験を通して今」(パネルディスカッション)でご主人(勝沼先生)の発病、告知、手術、お亡くなりになったとき、さらにその後におけるご自身の悲しみを乗り越えた人生哲学、「生と死を考える会」でのお仕事などについて、述べられている。いずれも、感動の極み。夫婦のいずれかが必ず体験する運命にある悲嘆を、いかに乗り越え、人生の成熟をはかるかを教えている。

5. アーチェリー事始め。最近、目黒区勤労福祉会館の初心者講習会で、アーチェリーを始めた。老若男女を問わず、体力作りに良いスポーツで快適さを味う。環境汚染の心配は全くなし。

6. O. B.会のこと—1984～85年ごろ、渡辺 弘先生から熱心にお話があったが、当時、お手伝いできず、お詫びいたしたい。

おわりに——“締切り近し”の通知を受けてワープロを打つ。敬老の日。近くの八幡神社の祭礼。威勢のいいミコシの音を聞きながら。(1991. 9. 15)